

各施設年次報告

芦生研究林年次報告

芦生研究林長 長谷川尚史

●教育研究

2012年度における芦生研究林の利用者総数は延べ11,082人であり、311人の増加であった。実習等の教育利用者数は1,785人で、うち学内利用が22件と前年と同数、他大学の利用は1件で2件減少した。また研究利用者数は1,985人であり、学内利用が34件、他大学等が17件といずれも微増した。学生実習のうち2件はフィールド研が主催し、全国の大学から学生を募集して行われた。全国大学演習林協議会と連携して開催された公開森林実習では、7大学（東京農工大学、お茶の水大学、信州大学、静岡大学、三重大学、鳥取環境大学、島根大学）から8人の学生が参加し、うち1人は特別聴講生として協定に基づく単位互換手続きが執られた。森里海連環学実習Aでは、学内6学部12人のほか、他大学から1人の学生が参加した。

教育研究として、本年もシカによる植生変化に関する一連の教育研究事業を実施した。上谷の一流域において13haの集水域全体を防除柵で保護する試験が行われており、設置後6年を経過して回復が顕著になった植生のモニタリングとともに、水質に関するモニタリングも継続して実施し、卒業論文等の作成に活用された。また本年度は、概算要求事業「森里海連環学による地域循環木文化社会創出事業」において下谷流域の伐採試験地（スギ一斉人工林）でも、間伐・搬出を行うと同時に一部にシカ柵を設置し、間伐による植生や水質の変化を計測するとともに、そのシカの影響を観測する試験を開始した。シカによる食害が著しい芦生研究林では、このような防鹿柵の設置と管理は、教育研究を実施する上で大変重要な業務となっており、本年度も研究林職員が積極的に柵の維持管理作業の補助を行った。

一方、フィールド研の研究プロジェクトである林内の実生発生調査および採水・水質調査を継続したほか、温帯林最大規模の長期生態系調査プロットである16haの集水域における20年目の毎木調査を実施した。さらに、動物調査用センサーカメラを3台購入し、林内に設置し、自動撮影による動物の生息調査を開始した。

●社会連携

フィールド研主催事業として第22回芦生公開講座「今、森から考える」を開催した。本年のテーマは「森を伐る」とし、一般参加と高校生グループ参加を合わせて37人が参加した。また芦生研究林主催事業として「芦生の森自然観察会」を春と秋に企画した。共同開催事業としては、自然体験教室（美山町内小学校第4学年）、宿泊体験学習（美山中学校）、校外森林体験実習プログラム（京都府立北桑田高校）、サマーチャレンジ（洛南中学校）、フィールドワーク研修（大阪府立住吉高校）が行われた。公共団体等が主催する教育講座として、地域の宿泊施設である芦生山の家、美山町自然文化村、針畑ルネッサンスセンターからのガイドツアーを引き続き受け入れたほか、NPO法人や地方自治体が主催する各種の市民講座へのフィールド提供と研究林内での講義、研修への協力などを行った。さらに、芦生地域有害鳥獣対策協議会によるボランティア活動に協力するとともに、北部構内において開催されたシンポジウム「知ろう、守ろう芦生の森—豊かな森の再生に向けて」を共催した（参加者約140人）。本年度の報道関係等からの取材件数は5件であった。

芦生研究林では平成9年にガイド養成講座を開催し、16人の認定ガイドによるガイドツアーを受け入れてきたが、15年が経過し様々な問題が生じてきたことから、本年度にガイド連絡会を組織し、今後に関する意見・情報交換を行う場を設けた。

●施設の特記事項

過去のナラ枯れ被害木の倒木、枝の落下が多くなっていることから、歩道沿いの枯死木の伐倒を行うとともに、一般入林者の入林規則を改定した。また現在、芦生研究林周辺が新たな国定公園として指定される方向で調整が行われており、地権者や地域住民等の関係者を交えた協議を行った。一方、芦生研究林の地上権契約期間は 2020 年までであり、地権者の見学会（参加者約 50 人）および地権者との会合を開催し、契約延長等に関する協議を行った。



公開森林実習「水質パックテスト」



木文化プロジェクト「請負間伐」



公開講座「テーマ：森を伐る」



ガイド連絡会

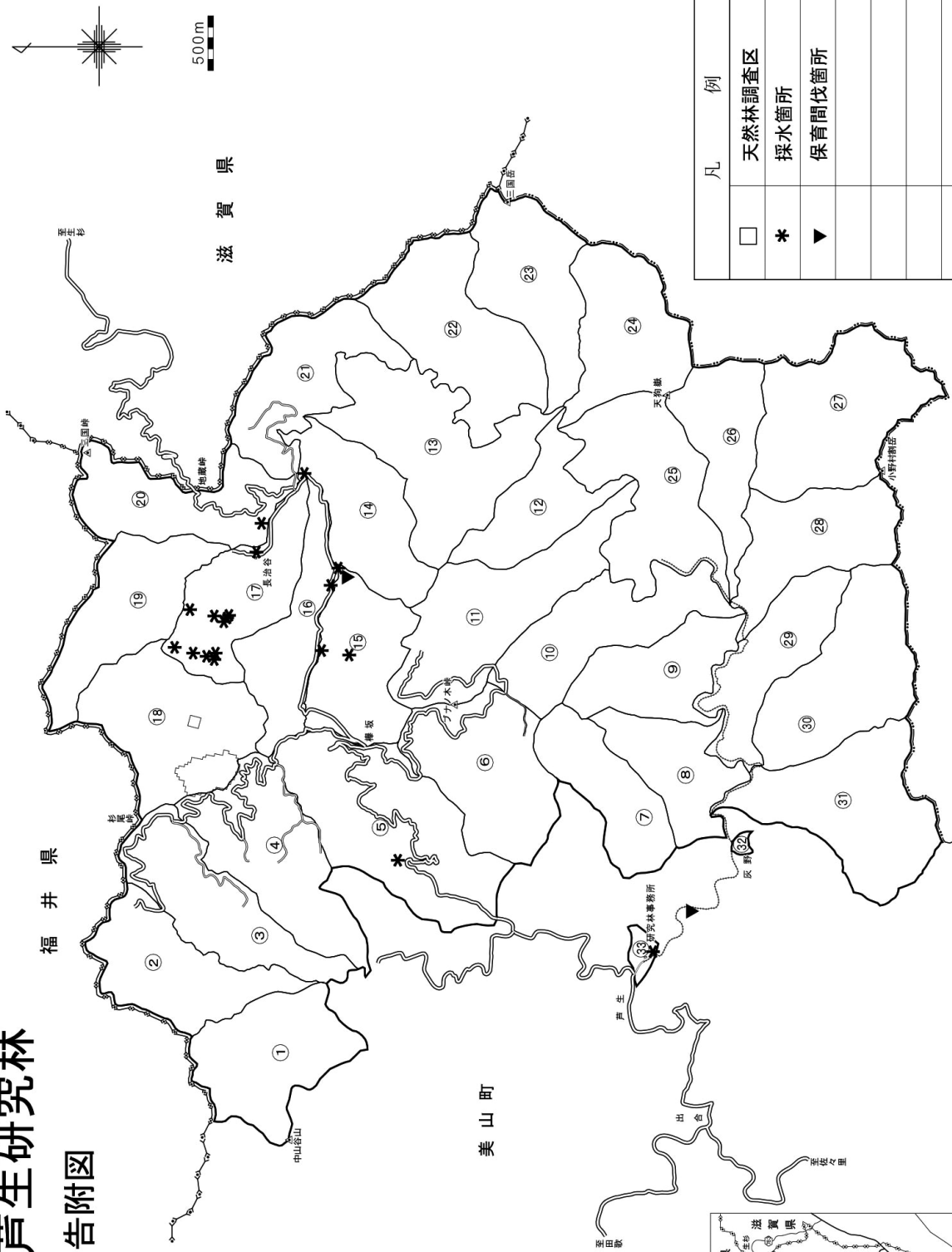


地権者説明会

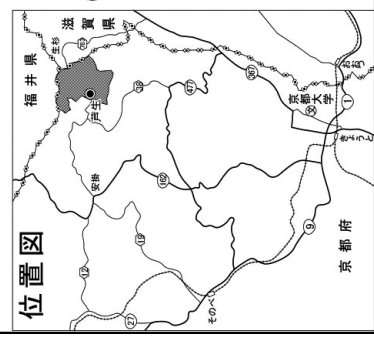


センサーカメラで撮影されたツキノワグマ

京都大学芦生研究林 年次報告附图



凡 例	
□	天然林調査区
*	採水箇所
▼	保育間伐箇所



北海道研究林年次報告

北海道研究林長 舘野隆之輔

●教育研究

北海道研究林は、釧路湿原、阿寒、知床の 3 つの国立公園と至近距離にあり、2012 年度もその地理的特性を生かした教育研究が行われた。2012 年度は教育利用 7 件、研究利用 19 件、その他利用 2 件の合計 28 件の利用申請を受け付け、延べ 1,468 人の利用を受け入れた。

教育利用は、全学共通および農学部の実習が 3 回と少人数セミナー 1 回が行われ、延べ 567 人の利用があった。「森里海連環学実習 C」は北海道大学厚岸臨海実験所と共同で行い、8 月 31 日～9 月 6 日の 7 日間の日程で、本学の教育学部、薬学部、理学部、工学部、農学部、1～2 回生 10 人と、北海道大学の理系総合学部、文系総合学部、農学部、理学部、工学部、医学部、1 回生 10 人の計 20 人が参加し、自然度が高い別寒辺牛川の最上流部に近い標茶区から、牧草地として使われている中流、そして下流の厚岸湖にいたる流域の植生、土壌、水質、水生生物調査を通じて、森・里・海の繋がりについて学んだ。「北海道東部の人と自然・研究林実習 III」は、9 月 7～14 日の 8 日間の日程で農学部、理学部、法学部の 1～3 回生 9 人が参加し、北方の森林・湿原植生、森林の垂直分布や火山性土壌、道東の林業・林産業の現況を学ぶとともに間伐施業などを実践した。「北海道東部の厳冬期の自然環境・研究林実習 IV」は、2 月 17～23 日の 7 日間の日程で農学部、文学部、法学部、理学部、薬学部、総合人間学部 1～3 回生 21 人が参加し、季節凍土が発達する道東において、冬の森林、積雪・凍土の調査法を修得し、環境資源としての森林の役割や持続的な管理について学んだ。また 2012 年度は、北海道研究林において、数年ぶりに少人数セミナーが 8 月 5 日～9 日の 5 日の日程で開講された。少人数セミナー「北海道の森林」では、文学部 1 人、経済学部 2 人、工学部 2 人、農学部 1 人、総合人間学部 1 人の計 7 人が参加し、植生と環境条件との関わりに野外観察や調査を通して学び、また間伐などの林業体験を行った。

研究利用は、19 件の申請を受け付け、延べ 674 人の利用があった。本学 10 件延べ 569 人、他大学 4 件延べ 18 人、他機関 2 件延べ 5 人、一般 3 件延べ 82 人で、研究内容は森林の植生や物質循環など多岐にわたった。なお 2012 年度は、農学研究科に所属する学生が修士論文研究課題のために長期滞在して研究を行った。



研究林実習 III 西別岳登山



研究林実習 IV 積雪・土壌凍結調査

●社会連携

社会連携として、5件の催しを実施し、延べ149人の利用があった。研究林主催により標茶区で行ってきたミニ公開講座「自然観察・草木染め」を、今年度は日本学術振興会の研究成果の社会還元・普及事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」の一環として、「大学の森で学ぼう 2012」と題して小学生（5・6年生）と中学生を対象として行った。開催日は、7月28日（土）で、参加者は8人（中学生5人、小学生3人）で標茶町内から3人、釧路市内から5人であった。実施代表者の館野と実施分担者の北海道研究林職員8人に加えて、京都から農学研究科森林情報学分野院生1人が実施協力者として、プログラム実施に携わった。また当日は地元新聞社2社の2人、学術振興会から事業担当の委員と職員の2人、保護者1人の参加があった。

また研究林主催による白糠区で行ってきたミニ公開講座「自然観察・草木染め」を、今年度は京大ウィークスの一環として行った。開催日は、10月20日（土）で、参加者は10人であった。沼幌小学校との共催の「木工教室」は、6月27日に開催し小学生6人が参加し、子供たち自らがデザインした様々な作品を作りあげた。標茶町教育委員会との共催の「しべちゃアドベンチャースクールジュニアリーダー養成講座」は、1月19日～1月20日に開催し、小学生13人中学生1人高校生2人が参加し、スノーシューを着用して冬の樹木の様子や雪上の動物の足跡を観察した。



ひらめき☆ときめきサイエンス



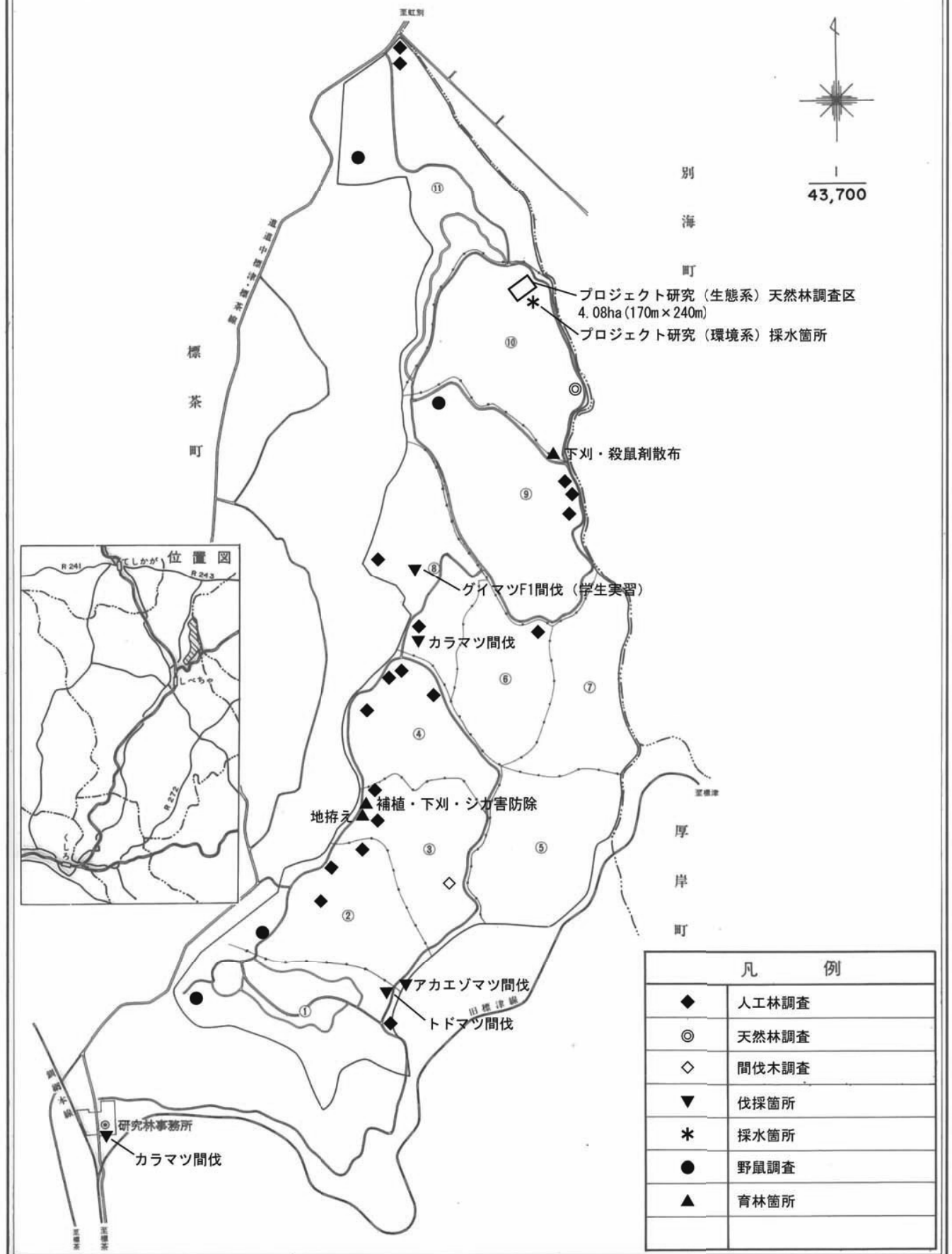
標茶小学校遠足

●施設の特記事項

今年度は、社会連携活動において、日本学術振興会の研究成果の社会還元・普及事業「ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～」や京大ウィークスなど他の行事の一環として行うことで、地元の北海道新聞に募集広告の掲載や釧路駅にポスター掲示を行う費用を獲得し、広報活動の対象範囲を従来より広げて行うことが出来た。

また引き続き、北海道林業試験場との共同研究や森林総合研究所北海道支所の「北海道野生生物観測ネットワーク」への参加など外部研究機関と連携した調査研究を行っている。

京都大学北海道研究林標茶区 年次報告附図



和歌山研究林年次報告

和歌山研究林長 徳地直子

●教育研究

2011年の水害によって研究林内の林道への車の乗り入れが不可能になったことから、昨年に比べて利用者数が大きく減少した。2012年度の研究利用は7件あり、延べ87人日の研究利用を受け入れた。学内からの利用はフィールド研教職員や農学研究科からの利用が中心であった。大学関係以外からは、地元和歌山県下からのさまざまな研究者の利用が見られた。主な利用者の組織は、和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課、日本野鳥の会和歌山県支部であった。

一方、教育利用は、比較的被害の少なかった研究林周辺の林道を利用する形で、毎年利用されているのは例年通り実施できるよう、安全に配慮しながら調整を行った。6件の申請を受け付け、延べ142人日の利用があった。学内からの利用として、フィールド研教員による少人数セミナーを実施した。学外の利用は有田川町内の小・中学校および高等学校による体験学習であった。高校の利用は県立有田中央高等学校清水分校による授業である「ウッズサイエンス」とSHIMIZU TIME（森林ウォーク）と称する授業の利用があった。ウッズサイエンスでは、年間を通じて合計11回の利用があった。小学校からは同町立八幡小学校から「森は友だち森林の町清水」と名付けられた授業を、中学校からは同町立八幡中学校から「職業体験学習」の利用を受け入れ、技術職員を中心として対応した。



少人数セミナー「森のつくりだすもの」



有田中央高校清水分校ウッズサイエンス

●社会連携

社会連携事業のうち、和歌山研究林が主体的に行っている地元小中高等学校に対する連携事業はすでに述べたとおりである。本年度はさらに、和歌山研究林の地権者であるマルカ林業(株)および和歌山県とで三者協議会を組織し、森林経営計画の共同立案をはじめ、和歌山県中紀地域における人工林の間伐を中心とする施業方法の検討、森林によるCO₂吸収に関するオフセットクレジット（J-VAR等）の導入可能性、和歌山研究林の森林を活用した森林についての知識と森林が生み出す製品と活動の価値についての森林環境教育プログラム（LEAF等）構築などに関する協議を開始した。この活動の一環として、12月には有田振興局においてシンポジウム

を開催し、研究林周辺における林内路網検討会も実施した。まだ勉強会の段階であるが、今後、和歌山研究林周辺の民有林および県有林との連携をさらに広げ、フィールド研における研究成果を活用しながら、森林資源を活用した総合的な地域活性化を目指していく予定である。

●施設の特記事項

2011年9月3日に発生した紀伊半島大水害では、和歌山研究林でも912.5mmの降水があり、林道を中心に大きな被害を受けたほか、バックホウ2機も流失した。国立公園に指定されている高野龍神スカイラインでも大規模な崩落があり、迂回路として研究林の敷地を提供した。町道部分の多くは、和歌山県および有田川町関係者の協力により、比較的速やかに復旧されたが、研究林内の路網は災害復旧申請のために、被災後もそのまま保存し、手作業による最小限のメンテナンスを実施している。本年度は災害復旧のための測量が行われたが、実際の復旧工事の開始は2013年後半となる見込みである。この間も降水によって法面の崩壊箇所の拡大が続いており、今後の対応が課題となっている。



紀中流域森林・林業活性化シンポジウム



林道被災箇所の視察

上賀茂試験地年次報告

上賀茂試験地長 安藤信

●教育研究

上賀茂試験地では、2012年度の利用申請が計54件あり、教育研究に、市民の見学等の利用も加えると延べ2,494人が訪れた。

教育に関しては18件の申請があり、利用者数は791人であった。内訳は、フィールド研、農学部森林科学科、農学研究科地域環境科学専攻、大学院地球環境学舎等の学内の利用が11件で、学外は京都府立大学、京都教育大学、京都精華大学、京都造形芸術大学等によるものであった。また、他大学の学生を対象にした「公開森林実習－近畿地方の奥山・里山の森林とその特徴－」は3回目となり、6大学から8名の参加があった。

研究に関しては21件の申請があり、利用者数は516人であった。



公開森林実習



食農教育の実践Ⅱ（京都教育大学）

●社会連携

社会連携活動として、2012年度も春と秋に2回の自然観察会を開催した。春の観察会には19人、秋には21人の参加があり、応募者にはリピーターも多い。これらの活動以外にも、京都市青少年科学センターの「未来のサイエンティスト養成講座」、総合地球環境学研究所の「地球環境学の扉」など、学内外の諸団体が主催する観察会等を積極的に受け入れた。



秋の自然観察会



未来のサイエンティスト養成講座

●施設の特記事項

試験地周辺では、近年の急速な宅地化にともない、境界部の森林管理が問題になってきている。2012年度も、14、15、16林班の危険木75本16m³を、境界支障木として伐採した。

2000年代半ば以降に再び被害が発生しているマツ枯れは、依然として、150本35m³の被害量があった。

ナラ枯れは、前年度より大きく減少し、38本18m³の被害量となった。被害木は伐倒、玉切り、集積するとともに、一部は薪ストーブの燃料として活用した。外国産ナラ類など、とりわけ貴重な見本樹については、根元から数mの高さまでの幹部をナイロンでラッピングするという方法に、樹幹注入剤の使用も併用して保護に努めている。

講義室、実験室、標本室の耐震工事が実施された。標本室は、工事に伴い、間仕切りし収納部屋を設けた。また、杉木皮葺きの玄関屋根の修繕及び、屋根と壁の塗装も併せて行われた。標本類は、現段階では一般展示用のものと学術上貴重なもの、整理段階の資料が混在する。展示物を整理し、利用しやすい展示方法の検討を開始した。

試験地では設置以来海外の100以上の植物研究機関と交流を持ち、種子交換業務を継続している。2012年度には芦生研究林、和歌山研究林、八丁平(京都北山)、比良山(滋賀県大津市)、そして試験地内などにおいて種子採取を行った。収集した種子は、ブナ科、スイカズラ科、ツツジ科などが多かった。36科96種を掲載したリストを作成し、38ヶ国138機関に送付した。これに対し45機関から、延べ501種の注文を受けた。人気が高かった種は、クリやカラスシキミ、イヌブナなどであった。

試験地では54科232種を発注した。その中心は過去から収集を続けているマツ科45種と、ブナ科18種である。



改装を行った標本館



標本館室内

表-1 リスト掲載種数

科名	種数	科名	種数		
ACERACEAE	カエデ科	9	LAURACEAE	クスノキ科	6
ACTINIDIACEAE	マタビ科	1	MAGNOLIACEAE	モクレン科	1
ANACARDIACEAE	ウルシ科	2	MELIACEAE	センダン科	1
AQUIFOLIACEAE	モチノキ科	4	NYSSACEAE	ヌマミズキ科	1
ARALIACEAE	ウコギ科	3	PINACEAE	マツ科	2
BERBERIDACEAE	メギ科	1	ROSACEAE	バラ科	5
BETULACEAE	カバノキ科	3	RUTACEAE	ミカン科	2
CAPRIFOLIACEAE	スイカズラ科	6	SAXIFRAGACEAE	ユキノシタ科	4
CLETHRACEAE	リョウブ科	1	SCHISANDRACEAE	マツブサ科	1
CORNACEAE	ミズキ科	2	STACHYURACEAE	キブシ科	2
CUPRESSACEAE	ヒノキ科	1	STERCULIACEAE	アオギリ科	1
ERICACEAE	ツツジ科	6	STYRACACEAE	エゴノキ科	3
EUPHORBACEAE	トウダイグサ科	2	SYMPLOCACEAE	ハイノキ科	2
EUPTELEACEAE	フサザクラ科	1	TAXODIACEAE	スギ科	1
FABACEAE	マメ科	1	THEACEAE	ツバキ科	3
FAGACEAE	ブナ科	12	THYMELAEACEAE	ジンチョウゲ科	1
JUGLANDACEAE	クルミ科	1	VERVENACEAE	クマツヅラ科	2
LARDIZABALACEAE	アケビ科	1	VITACEAE	ブドウ科	1
* 前年度採取種子17種、採取地が異なる重複種子7種含む		合計		96	

表-3 受注件数が多い上位9種

種名	受注件数(機関)	
クリ	Castanea crenata	23
カラスシキミ	Daphne miyabeana	21
イヌブナ	Fagus japonica	19
ダンコウバイ	Lindera obtusiloba	16
オオイタヤマメイツ	Acer shirasawanum	14
アサノハカエデ	Acer argutum	13
オオモミジ	Acer amoenum	12
ブナ	Fagus crenata	12
ミズナラ	Quercus crispula	11

表-2 受注状況

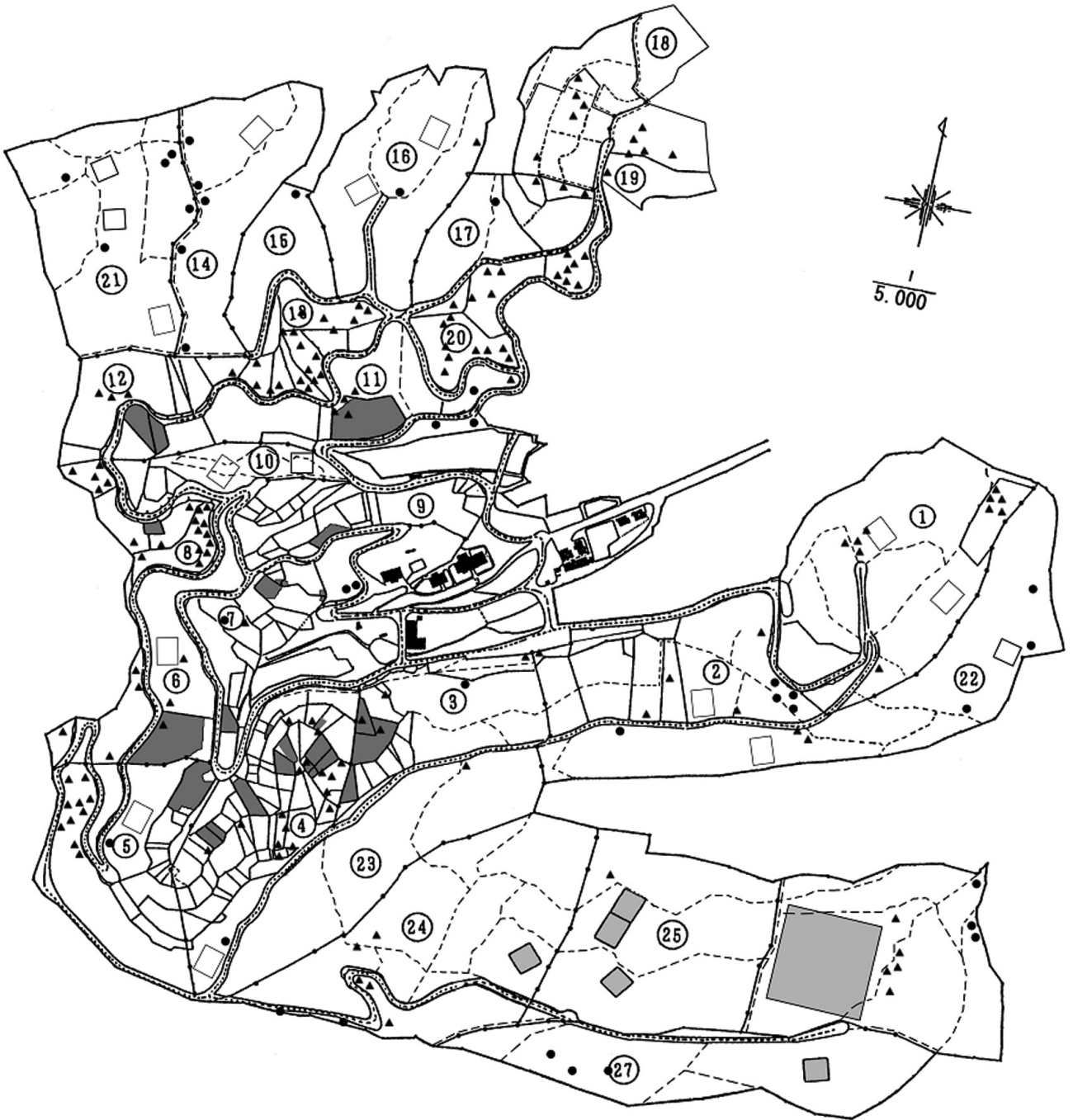
地域	リスト発送数 (機関)	受注件数 (機関)	受注延べ数 (種数)	発送延べ数 (種数)
欧州	112	38	429	406
北米	14	6	72	69
アジア	9	1	33	26
オセアニア	3	0	0	0
合計	138	45	534	501

表-4 発注種数





科名	発注種数	科名	発注種数		
ACERACEAE	カエデ科	16	LOGANIACEAE	マチン科	1
ANACARDIACEAE	ウルシ科	3	MAGNOLIACEAE	モクレン科	1
APOCYNACEAE	キョウチクトウ科	1	MELIACEAE	センダン科	1
AQUIFOLIACEAE	モチノキ科	1	MORACEAE	クワ科	3
ARALIACEAE	ウコギ科	3	MYRSINACEAE	ヤブコウジ科	3
ARECACEAE	ヤシ科	5	MYRTACEAE	フトモモ科	3
BETULACEAE	カバノキ科	5	OLEACEAE	モクセイ科	4
BIGNONIACEAE	ノウゼンカズラ科	2	PINACEAE	マツ科	45
BIXACEAE	ツゲ科	1	POACEAE	イネ科	1
BORAGINACEAE	ムラサキ科	1	PODOCARPACEAE	マキ科	7
CACTACEAE	サボテン科	1	PROTEACEAE	ヤマモガシ科	3
CARPRIFOLIACEAE	スイカズラ科	1	RHAMNACEAE	クロウメモドキ科	3
CASUARINACEAE	モクマオウ科	1	ROSACEAE	バラ科	9
CELASTRACEAE	ニシキギ科	3	RUBIACEAE	アカネ科	3
COMBRETACEAE	シクンシ科	2	RUTACEAE	ミカン科	4
CUPRESSACEAE	ヒノキ科	12	SALICACEAE	ヤナギ科	1
ELAEAGACEAE	ホルトノキ科	2	SAPINDACEAE	ムクロジ科	4
ERICACEAE	ツツジ科	16	SAPOACEAE	アカテツ科	1
EUPHORBACEAE	トウダイグサ科	1	STERCULIACEAE	アオギリ科	1
FABACEAE	マメ科	9	STYRACACEAE	エゴノキ科	1
FAGACEAE	ブナ科	18	TAXACEAE	イチイ科	4
GROSSULARIACEAE	スグリ科	2	TAXODIACEAE	スギ科	8
HAMAMELIDACEAE	マンサク科	1	THEACEAE	ツバキ科	2
HELWINGIACEAE	ハナイカダ科	1	TILIACEAE	シナノキ科	3
HERNANDIACEAE	ハスノハギリ科	1	ULMACEAE	ニレ科	1
HIPPOCASTANACEAE	トチノキ科	2	VERBENACEAE	クマツヅラ科	2
LAURACEAE	クスノキ科	1	VITACEAE	ブドウ科	1
		合計		232	

京都大学上賀茂試験地

年次報告附図



凡 例

	天然林固定標準地調査
	人工林毎木調査
	マツ枯れ被害木調査
	ナラ枯れ被害木調査

徳山試験地年次報告

徳山試験地長 中島皇

●教育研究

◎少人数セミナー(ポケゼミ：全学共通科目)「瀬戸内に見る森里海連環」の実施

8/4～7の日程で7名の1回生(文(1)、法2、教1、工2、農(1)：カッコは女子数)が参加し、今年度も特任教授向井宏先生とTA鈴木伸弥さん(M1)の協力を得て、徳山試験地と末武川源流の烏帽子岳から瀬戸内海(大島人工干潟)までのフィールドに加え、大田原自然の家(周南市の施設：昭和46年に休校になった学校)の宿泊利用を実施したため、市の北部に広がる人工林の見学を行った。今回は地元出身で京大生の先輩でもある九州大学の柳哲雄先生が参加され、昔の末武川河口域の話や海の研究について紹介頂いた。

◎檜皮剥皮実験調査

全国大学演習林共同研究の一環として、檜皮採取のための剥皮がヒノキの生長にどのような影響を及ぼすかを検証するため、1998年2月に調査木の設定がなされ、剥皮木と非剥皮木を伐倒し、樹幹解析を行う調査を5年ごとに行って来た。今回、最終年となる調査を2013年1月に、他研試(芦生・和歌山)若手職員の協力を得て実施した。解析用の円盤は担当の各大学へ送られ、今回の結果はまだ出ていないが、これまでの調査結果では、剥皮が及ぼす生長への顕著な影響は認められていない。

◎瀬戸内型気候における河川水質形成機構の解明

日本の中でも降雨量の少ない地域における河川水質形成機構の解明を目的として、試験地内の森林溪流及び末武川流域の森林から沿岸までの河川水質を測定している。



ポケゼミ



檜皮剥皮調査

●社会連携

◎周南市との連携協定締結

2012年9月27日に、フィールド研が周南市との連携協定を締結した。協定書の内容は「地域創造・地域振興及び教育・研究の発展を目的として、それぞれの自主性に基づいて、相互の交流・連携を図るもの」で、具体的な項目については「森里海連環学を基礎とした地域創造・地域振興に関すること」など、別に取り決めている。

◎連携公開講座と連携講座他

連携協定締結を受け、10月に行った連携公開講座は締結記念公開講座、また、京大ウィークス 2012 のイベントとしても実施した。市役所の向かいにある保健センターで、向井特任教授と中島試験地長による森里海連環学に関する講演会並びにフィールド研を紹介するポスター展示を行った。参加者は47名、周南市以外からの参加もあった。

昨年度に続き連携講座を実施した。この講座は、年3回(第4～6回・6月、9月、11月)日曜日の午前中に徳山試験地の作業所にある講義室で森里海連環学や森林学の講義を受講し、その後お昼までフィールド見学等を行うものである。受講者は全3回で51名の参加であった。

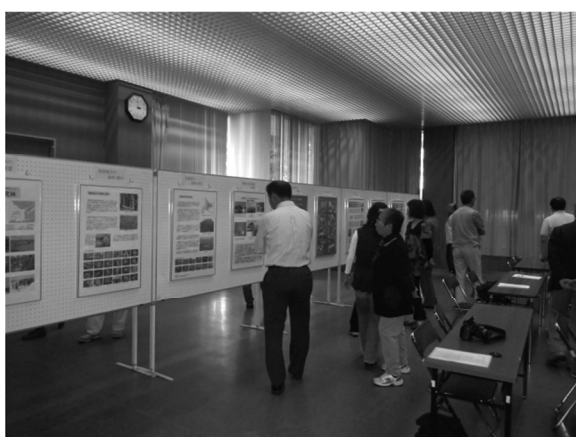
8月に周南市観光ボランティアガイドの会の研修会が(参加者30名)実施された。



調印式



連携公開講座（講演会）



連携公開講座（ポスター展示）

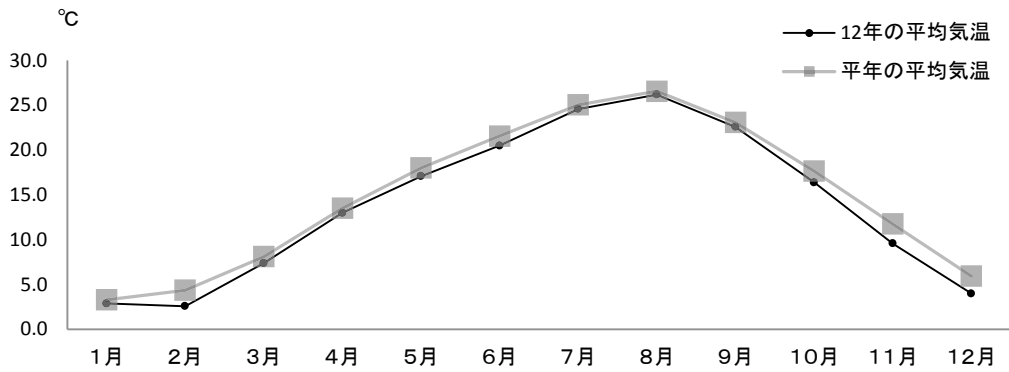


連携講座（第5回）

●その他

8月に産業医の巡視と事務所棟の耐震工事が行われた。12月に書類倉庫の床改修工事が行われた。

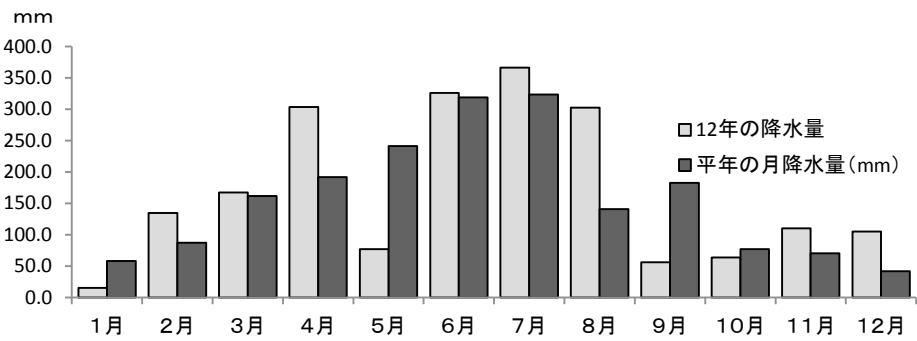
徳山試験地の気象環境



月平均気温平年対比(2012年)

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均気温(°C)	2.9	2.6	7.4	13.0	17.1	20.5	24.6	26.2	22.6	16.4	9.6	4.0
平年の平均気温(°C)	3.3	4.4	8.1	13.5	18.0	21.6	25.1	26.6	23.1	17.7	11.8	6.0

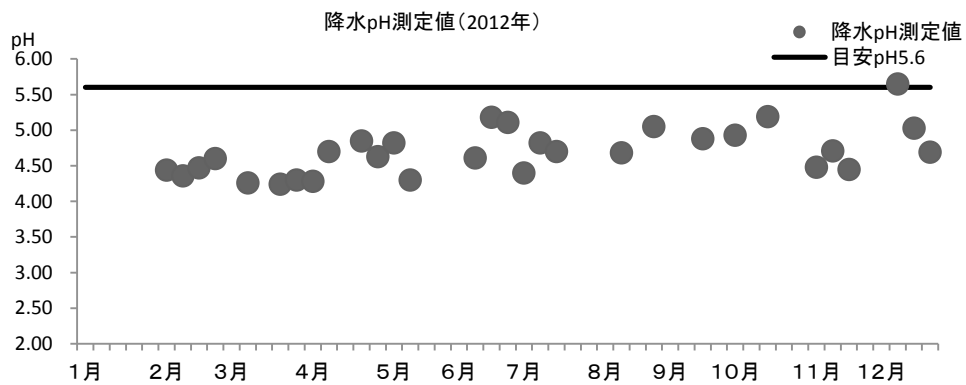
※1981年～2010年の平均気温(9時の気温) 2011年からは全日の平均気温



月降水量平年対比(2012年)

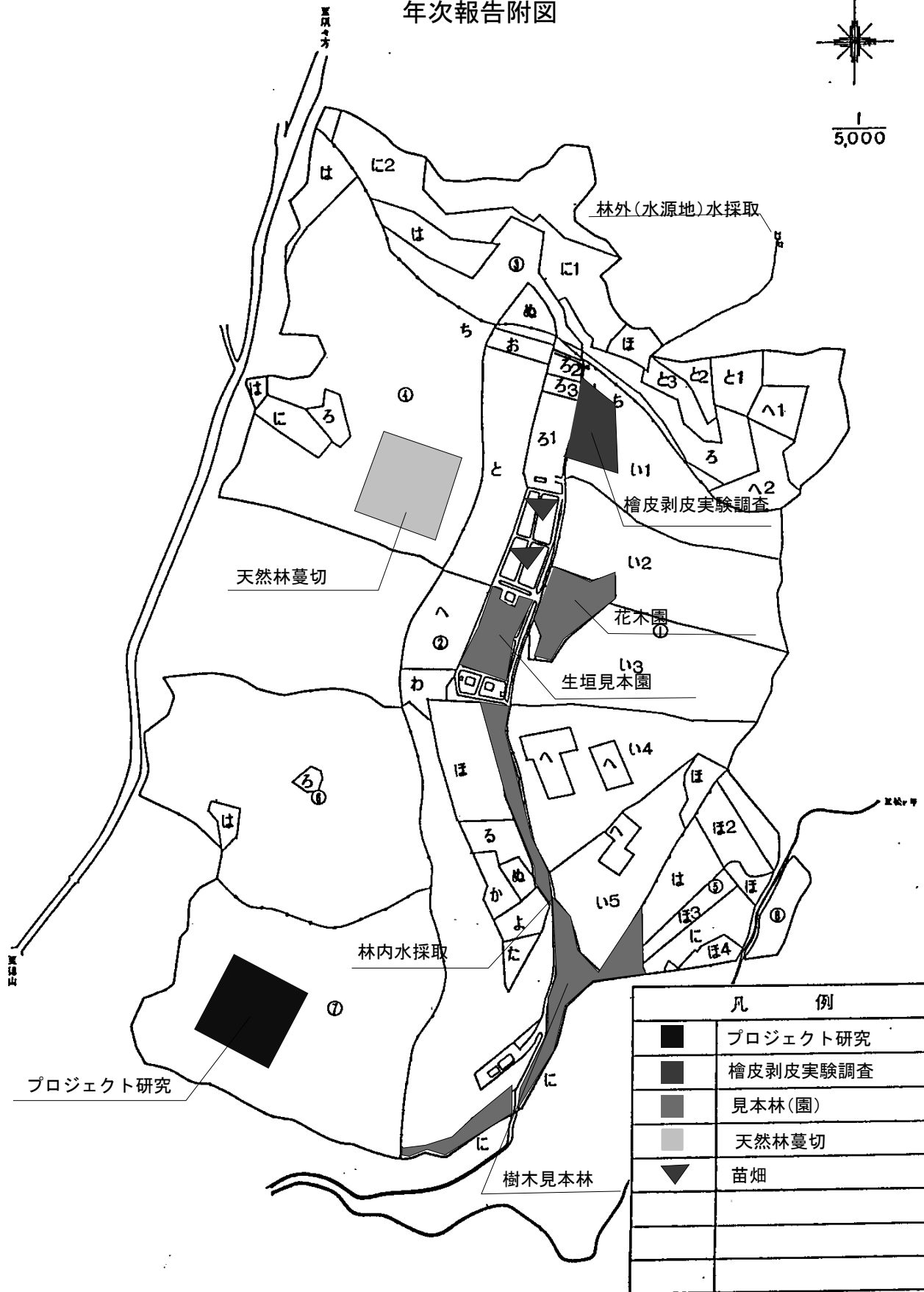
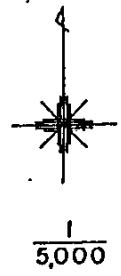
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
月降水量(mm)	15.0	134.5	167.5	303.5	77.0	326.0	366.5	302.5	56.0	63.5	110.0	105.0
平年の月降水量(mm)	58.2	87.1	161.7	191.9	241.3	319.2	323.7	140.8	182.8	76.9	70.0	41.8

※1981年～2010年の平均降水量



京都大学徳山試験地

年次報告附図



凡 例	
	プロジェクト研究
	檜皮剥皮実験調査
	見本林(園)
	天然林蔓切
	苗畑

北白川試験地年次報告

北白川試験地長 吉岡崇仁

●教育研究

北白川試験地は、フィールド研の施設の中で唯一本学キャンパス内に所在する施設であることから、研究室に直結した研究が可能であり、その立地を活かした教育・研究利用ができる。2012年度には、24件の研究利用、6件の教育利用、合計30件の利用申請を受け付け、年間利用者数は、延べ1,559人であった。例年のように部局内と農学研究科からの利用が中心であったが、これらに加えて、学内からの利用として教育学研究科、理学研究科、地球環境学堂からの利用があった。学外からは、昨年から引き続き京都学園大バイオ環境学部からの利用があった。2012年度の利用内容は、昨年度と同様であり、ヒノキ枝葉採取、土壌のサンプリング、植物観察等の実習や、苗畑を利用した植栽試験や温室内での鉢植えによる樹木類を中心とする植物の育成試験などであった。また、9月4日から6日の日程で実施された他大学を対象とする京都大学公開森林実習の一環として、東京農工大学、お茶の水女子大学、信州大学、静岡大学、三重大学、鳥取環境大学、島根大学の学部生（計8人）による実習利用があった。



食品有機化学実験



公開森林実習

●施設の特記事項

2012年度は、通常業務として、見本樹の剪定、草刈り、境界木の剪定等を行った。4月には、試験地内のセンペルセコイアが、台風並に発達した低気圧による強風により幹折れして、試験地東側にある農学部グラウンドのフェンス上に落下しフェンスを破損した。同時に試験地内に1本しかないメラノキシロンアカシヤも根返りをおこした。かろうじて萌芽枝があったので周辺保存して育成していたが、結局枯死してしまった。マツクイムシの被害でアカマツ2本も枯死してしまったので直営で伐採した。大径木のヒマラヤゴヨウ、アマ

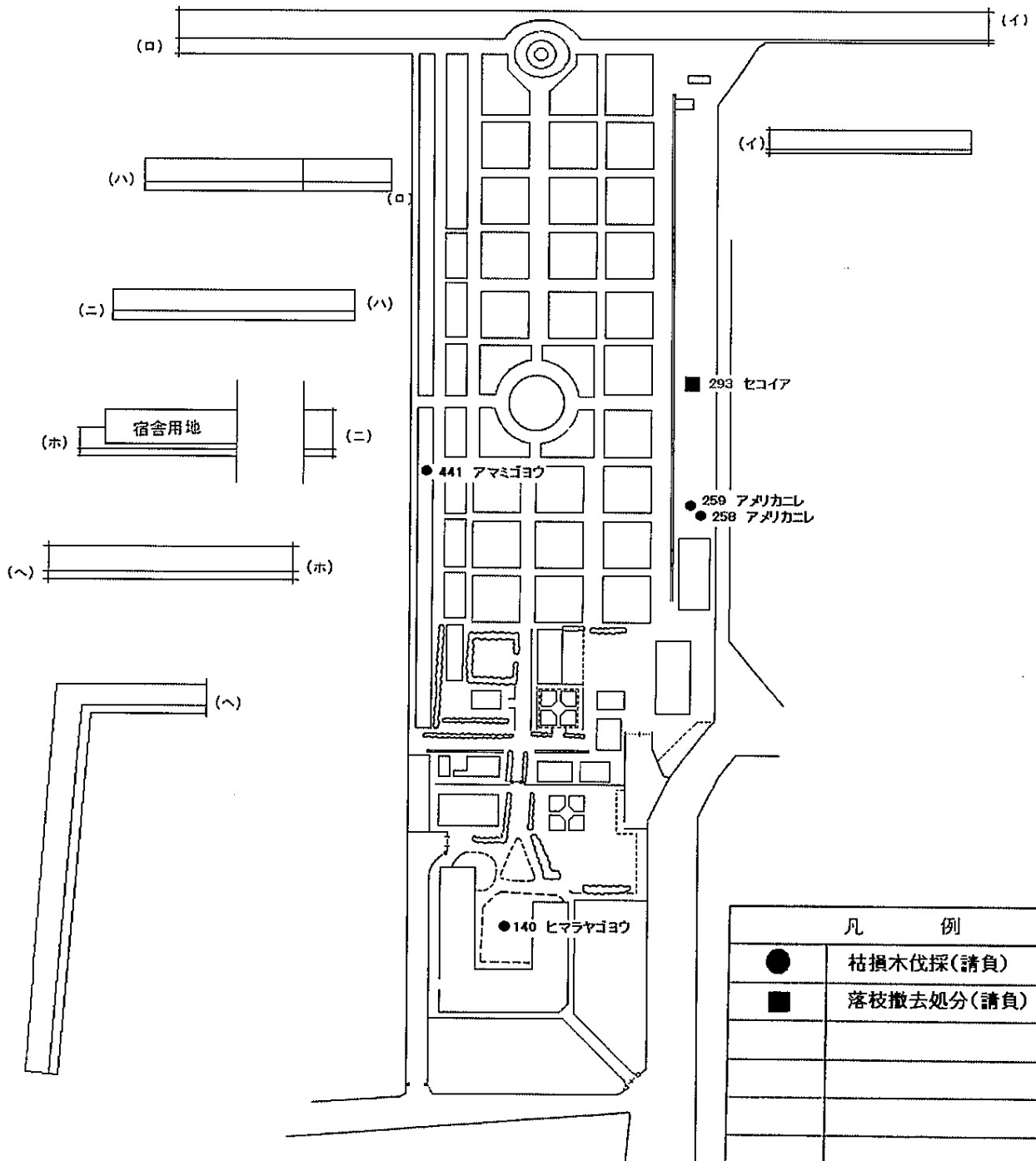
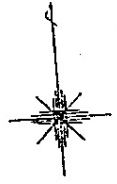


危険木枝下し作業

ミゴヨウ（ヤクタネ）が枯死してしまったが、試験地内にはそれぞれ1本しかなく現在、後継樹を探している。また、高所作業車をリースし、上賀茂試験地技術職員の協力を得て大径木のアメリカニレも伐採した。今後、試験地内に1本しかない樹木やレッドリストの絶滅危惧種であるアマミゴヨウ等の後継樹の育成に取り組む必要がある。

京都大学北白川試験地

年次報告附図



凡 例	
●	枯損木伐採(請負)
■	落枝撤去処分(請負)